第619号平成8年12月20日発行(毎月20日発行)
昭和49年8月31日第三種郵便物認可

1996年(平成8年)
12月号(No.619)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

マナスル登頂四十周年 ネパール行事報告

松田雄一

■計画の経緯

一九九六年五月九日はマナスル登頂四十周年になる。何かしなくてはならないと、今西壽雄氏は前から心配しておられた。なぜ五十周年でなく四十周年なのか？　第三次マナスル登山隊の平均年齢は三十七歳、これに四十年を加えると七十七歳であり、すでに六名の方が物故。五十周年では遅過ぎるからである。

その今西氏も、四十周年のこの日を待たず、昨年十一月十日に他界されてしまった。

ある日、今西壽雄氏が保管されていた資料の中にあった「Dr.西堀のインド・ネパール便り」を見る機会があり、クリシュナ・バハドゥール・バルマ氏(以下クリシュナ氏とする)が、マナスルの登山許可取得にいかに尽力されたかをつぶさに知ることができた。四月十八日に開催の評議員会で本会の名誉会員に推挙することが決まったことは既報のとおりである。

七月初めに、在ネパールの吉田大使が一時帰国され、今年十月三日にカトマンズで「日本・ネパール国交樹立四十周年記念レセプションを行うことになったので、できれば国交樹立にゆかりのある日本山岳会からも記念式典に出席してほしい」旨の連絡をいただいた。それならば、その時にカトマンズに出かけ、当時お世話になった方々をお招きして感謝のパーティーを開き、席上クリシュナ氏に対し名誉会員章を贈ってはどうか、ということになった。八月二日に常務理事会を開いてネパールでの記念行事の開催を決め、村木会長を団長とする代表団を派遣することにし、準備を進めることになった。

その後、マナスル登山に後援いただいた毎日新聞社に趣旨を説明したところ、この行事も後援していただけることになった。

このようにして十月四日の展覧会、レセプション及び五〜七日のマナスルへのトレッキングの計画を具体的に決め、隊員及びその関係者に参加を呼びかけたところ、二十名を超える方々からの参加申し込みがあった。

(編者注＝その後大使館主催レセプションは都合により延期になった)

■カトマンズでの記念行事

日本からの参加者は本稿末尾に記載のとおり、マナスル隊員五名を含む会員十六名、隊員家族五名その他関係者の計二十五名である。

九月二十九日、現地での準備のため、松田、宮原の二名が先発することになり、本隊は十月二、三日の両日出発し、十月三日の深夜全員がカトマンズに集合した。十月四日には、日本大使公邸で吉田大使招待による歓迎昼食会に村木会長以下十名が出席、他は展覧会の準備を行った。

◆記念展覧会

記念展覧会が十月四日午後四時よりホテル・ヒマラヤにおいてネパール・日本研究センター(以下NNRCと略称)主催、日本山岳会、毎日新聞社の協力で開催された。

目次

マナスル登頂40周年・ネパール行事報告……1
平成8年度全国支部懇談会……4
追悼・林田正幹さん……5
海外の山・若きシェルパの生と死 6
報告
岩登り技術研修会……7
新入会員オリエンテーション…7
上高地インタープリター……8
1992年同期会・懇親山行……9
三水会現地集会・笠取山……9
シバプリの丘の植林……9
東西南北
福島・群馬・新潟三県による尾瀬総合学術調査について……10
遥かなり『天上倉山』……10
英国山岳会を訪ねて……11
感動を求めて……12
チベット高原走破の旅……13
山の切手・クルト・シュロッサー13
山と医療・役に立つ医療器具……14
支部だより……16
熊本支部　岐阜支部
図書紹介……17
図書室受入報告・新入会員……19
会務報告……20
ルーム日誌……21
INFORMATION……22
住所変更・会員異動……23

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日　10〜20時
水・金曜日　13〜20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日　13〜20時
▶年末年始休み　12月29日〜1月5日

展示品はマナスル登頂時の全紙大の写真三十枚、毎日新聞掲載紙（以上は毎日新聞社提供）、登頂記念金メダル、勲六等双光旭日章、東京都名誉都民の鍵、アルバム（以上ガルツェン氏出品）、ヒマラヤ記念切手のFDCリーフ（多田内雄佗夢、早川元久氏出品）、日ネ友好関係の記念写真、および人形、クリシュナ氏の著書（以上NNRC出品）等々。

定刻の午後四時、S・B・デウバ首相のテープカットにより入場。NNRCの理事インディラ・ラナ女史の司会により式典が行われた。冒頭主賓のデウバ首相より大略次のような祝辞が述べられた。「ネパールと日本との外交関係が結ばれる以前、すでに両国の間には美しく温かな関係が始まっていた。一九五六年日本の登山隊がマナスルに登頂した日は、ネ・日両国にとって誇りの日である。まさにその年に両国の外交関係が樹立されたのであり、四十年を経たこの機会に、このような催しが企画され、ネパールと日本の友情が示されることは喜びにたえない」

ついでNNRCの総務理事R・K・パンデイ教授より歓迎の挨拶。NNRCの創設者クリシュナ氏からは「日本人の成功の秘密をネパール人は学ばなければならない。現在日本には二万六千人のネパール人がいるのに、彼等が何一つ学ぼうとしていないことは残念である」旨のオピニオン・スピーチが述べられた。日本側を代表し川喜田二郎氏が「我々日本人はいつまでも感謝の気持ちを忘れてはいない」と謝意を述べて式典は終わり、続いて『マナスルに立つ』のビデオが上映された。

◆記念レセプション

午後六時よりホールで、主賓に九十二歳のM・P・コイララ元首相（一九五二年にマナスル登山許可を出してくれた時の首相）を迎え、記念レセプションが毎日新聞社ビナヤ特別通信員の司会により開催された。

まず村木会長より「今年はマナスルに登頂して四十年に当たります。最初の入国、登山許可の取得についてお世話になったクリシュナ氏を本会の名誉会員に推薦し、当時のご好意に報いると同時に、この登山を通じてお世話になったネパールの皆様に感謝の意を表し、さらに将来も一層の友好と親善をはかりたい」旨の挨拶があり、ついで毎日新聞社小池唯夫社長のメッセージが伝えられた。

来賓祝辞として地域開発大臣のカマール・タパ氏は「ネパールのために日本が果たした援助は計り知れないものがある。これからもこのような友情が続くことを期待している」、駐日大使に任命されたK・B・マテマ大使は「任務を通じて友情を深めるよう努力したい」と挨拶された。

授章式に移り、クリシュナ氏に対し、村木会長より名誉会員章並びに記念の楯が贈られ、毎日新聞社からも『富士山の額』が贈呈された。ついでマナスル初登頂者ガルツェン・ノルブ氏の未亡人ペンバ・リタさん及び遺児のラクパ・ノルブ氏の紹介があり、本会より感謝を込めて記念品を贈呈。リエゾン・オフィサーとして参加されたサガール・プラサド・ゴータム氏にも同様記念品が贈られた。

マナスルの当時お世話になったロック・ダルシャン氏、スシュマ・小俣（旧姓シャハ）さん、並びに五名のマナスル隊員及び今西、小原両隊員夫人の紹介があり、最後にM・P・コイララ元首相の音頭により乾杯。祝宴に移り四十年間の旧交を温めた。

当日の出席者はクリシュナ氏のご家族、シャハ家一族、タクール元駐日大使、ネパール政府関係者、エリザベス・ホーリー女史ら報道関係者、NNRC関係者、ネパール登山協会（NMA）、トレッキング・エージェンシー関係者、在留邦人としては飯田吉輝公使をはじめとする大使館員、JICA関係者、大久保日本人会長（三井物産）など商社・駐在員の方々。現地参加者には熊谷義信、安藤久男、大河原汎二・由紀子夫妻、大阪市立大OB藤本勇氏夫人などがおり、約百三十名の盛会であった。

なお当日の模様は、現地の英字新聞二紙、ネパール語の日刊紙三紙に掲載された。池田常道氏がプレス・リリース用に作成してくださったクロニクルも好評であった。

■記念トレッキング

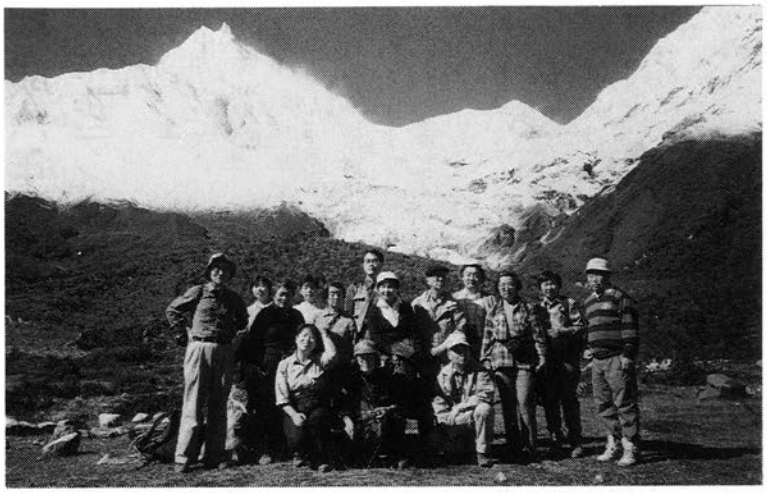
◆サマへのヘリ・ツアー

十月五日、曇り。ツアー参加希望者十七名は、ロシア製大型ヘリでサマへ向かったが、天候不良のため途中で引き返したので、午後はバスでカカニへ向かい、ラニバワンにある西堀氏ゆかりのボリ・ヴィラを視察した。

十月六日、曇り後快晴。好天の兆しあり、この日は予定どおりブリガンダキを経由してサマのヘリポートに着くことができた。本来ならばこのヘリを利用して、小西政継、石川富康氏らがカトマンズへ戻ることになっていたのだが、サマに着いてみると彼らはいない。トランシーバーで確認したところ、小西氏が九月三十日、プラトーで行方不明になったことを知り愕然とする。そして今更ながらヒマラヤ登山の恐ろしさを痛感したが、手のほどこしようがなかった。

日帰り組の今西、小原両ファミリー五人は記念撮影後、乗ってきたヘリでカトマンズに戻り、残りの十二名は付近にキャンプした。午後、サマの村やマナスル氷河末端のBC付近を散策。

十月七日、快晴。午前八時にマナスル遭難救援の大型ヘリが到着。その一時間後に我々がチャーターしたエイシアン・ヘリが到着。ラルキヤ越えの西、中谷両名を残し、一行はカトマンズに向けサマを後にした。



上／トレッキング＝サマに到着し、マナスルをバックに記念撮影する一行（10月6日）
下右／写真展をみるデウバ・ネパール首相。案内役はビナヤ毎日新聞特別通信員（10月4日）

名誉会員章を受け取るクリシュナ・B・バルマ氏（10月4日のレセプションで）

ガルツェン氏未亡人のペンバ・リタさんと遺児のラクパ・ノルブ氏

◆**ラルキヤ越えトレッキング**

サマで分かれた一行は、八日にサムドウでマナスルを越えるツルを見るチャンスに恵まれ、十日に雪のラルキヤ峠を越え、ビムタコーチよりマルシャンディを下り、十四日にベッシ・サハールに到着。十五日には無事カトマンズへ帰着した。

■再びカトマンズで

◆**王宮を訪問**

十月七日夕刻、ビレンドラ国王の侍従ナレンドラ・R・パンデイ氏からクリシュナ氏を通じて連絡を受け、国王にご挨拶する機会を得た。村木会長、山田、松田、今西夫人、滑志田の五名はクリシュナ氏同道の上、王宮を訪れ、国王陛下に親しく拝謁し、お礼を申し上げることができた。

◆**NMAによる歓迎会**

四日のレセプションにはダワ・ノルブ会長などNMA幹部の方が都合により出席できなかったので、我々の帰国に先立ち八日の夕刻、マルラ・ホテルで歓迎レセプションを開いてくださることになり、全員が招待を受けた。

この会はヒマラヤ登山関係者だけの楽しい集いで、久しぶりに多くのシェルパの友人に会うことができた。観光省のプラチャンドラ・マン・シン観光局長やジャナルダン・ネパール登山課長にも挨拶する機会を得た。またNMA懸案の山岳博物館についても意見交換をすることができた。

以上をもって実り多かった一週間のネパールの旅を終え、十月九日深夜RNA直行便で帰国の途に着いた。

■あとがき

今回のネパールの旅では、多くの友人と旧交を温めることができ、ネパールの方にも大変喜んでいただいた。心配されたトレッキングもほぼ予定どおり終了することができた。

最後になったが、この行事に参加して終始裏方に徹し尽力してくださった太田、吉永の両氏並びに現地におけるすべての手配でお世話になった宮原氏に深く謝意を表する。

［参加者］村木潤次郎、山田二郎、川喜田二郎、徳永篤司、松田雄一、今西芳子、小原晴子（以上隊員及び隊員夫人）宮原巍、神原達、太田晃介、吉永英明、宗實慶子、西孝子、中谷絹子、松田柳子、安藤文子、滑志田隆（以上会員）今西邦夫、中村敏夫、辻井清吾、小原岳郎、赤井裕子、赤井敬子、坂本スミ子、スシュマ・小俣、以上二十五名（順不同）

平成八年度全国支部懇談会
パネルディスカッション「中高年問題」を中心に

東海支部

十月五、六日、東海支部の主管により愛知県の奥三河「山びこの丘」一帯で全国支部懇談会を実施した。先の四十九回国体山岳競技の主会場でもあり、付属設備の巨大な人工登攀壁ブッポーウォールは、若いクライマーの登攀意欲をかき立てたことであろう。

中高年問題を熱心に討論する全国支部懇談会出席者

■パネルディスカッション

「中高年登山の諸問題」

午後二時から今回の目玉の一つであるパネルディスカッションが会議室で開催された。

パネリストは、尾上昇、小倉董子、長坂博、柳沢昭夫の四氏。コーディネーターは橋村一豊、司会は鈴木常夫が務めた。議題としては次の四つが取り上げられた。

●中高年初心者の指導について
①歩行の安定のために岩登り技術を教えることについて。②計画を立てることの指導について。③ルートファインディングの力をつけることについて。④バランスのとれたカリキュラムとは。

●指導の普及について
①私的山岳会などの指導。②カルチャーセンターなどの営業的講習会。③プロガイドの講習会。④常設的継続的な登山教室を一般に向けて開設する案。⑤ジャーナリズムからの啓発、弊害など。

●登山道の人工補助、山小屋について
①人工的補助、山小屋の過剰について。②アルピニズムとハイキングのフィールドの混在について。③登山コースの難易度、グレーディングについて。④登山道を自然に戻し、山小屋を減らすことについて。

●遭難救助対策
①入山者をチェックするルールは必要か。②救助をまかなう体制、人材、費用について。

東海支部には現在、中高年になってから登山を始めた人たちの組織・支部友会があり、約二百人が在籍している。支部友会の運営には支部も深く関わっているので支部員、支部友のパネルディスカッションに対する関心も強く、熱心に聞き入った。

一般登山路で岩登り技術は必要かどうか。歩行技術の蓄積は役立たないのか。自立のため、簡単な山行からリーダーを体験することの利点。講座だけで知識と技能は身につくのか。

私的山岳会のボランティアによる指導は可能か。カルチャーセンター受講後の受け皿はあるのか。プロガイドの講習会の利用価値はどうか。公的登山教室は開設可能か。文登研の現状はどうなっているのか。ジャーナリズムの情報が初心者に与える影響はどうか。指導標は必要か。山小屋は過剰か。し尿処理ができない山小屋は閉鎖すべきか。稜線上の山小屋は必要か。

捜索費用額の大きい保険はあるのか。単一の山岳会で救助能力はあるのか。レンジャー制度の導入はできるのか。

以上の論点で各パネリストから問題提起あるいは発言があり、定刻の午後五時まで討議された。

詳しい内容は、後日東海支部報に掲載を予定している。

■盛大に開催された懇親会

一方、会場のロビーには、今までの東海支部の海外登山の記録を写真で紹介するコーナーが設けられた。なかでも、二年がかりで継続中の環太平洋一周環境調査登山隊の活躍ぶりを紹介する鈴木邦則会員の力作によるパネル写真と世界地図が人目を引いた。

懇親会はブッポーウォール前の広場で開かれた。定刻十八時に長坂実行委員長の開会の辞で幕が開き、宮下副会長の挨拶に続いて、主管の尾上東海支部長が歓迎の辞を述べた。北海道から九州熊本までの十三支部と、東京本部からは貸し切りバスを仕立てての来訪、参加総数百四十一名の岳人が奥三河に集合した。東海支部員でもあるカジタックスの梶田社長より贈られた四斗樽を、越後、岩手、富山、岐阜、東海の各支部長さん方にご協力を願い、ピッケルで威勢よく鏡割りを行い、湯浅県岳連

会長の乾杯の音頭で祝宴に入った。
　幸いにも地元の秋祭りとジョイントでき、頭上には轟音とともに打ち上げ花火が炸裂し、歓迎ムードは一層盛り上がった。しばらくして会場中央に用意されたキャンプファイヤーの点火式を行う。本部の中川理事をはじめ、京都、静岡、福井の各副支部長さんと、支部の長老方にもトーチ棒を持っていただいた。続いてステージ上では、今夏ヒマラヤの難峰・ウルタルⅡ峰の初登頂に見事成功した当支部の松岡清司君の紹介と、来春、東海支部が総力を挙げて派遣するK2登山隊員の紹介を徳島隊長より行い、激励の声援と拍手が会場に鳴り響いた。
　時間の経過は速く二十時三十分、徳島副支部長の閉会の挨拶もそこそこに、今夕のもう一つの呼びもの、手筒・大筒花火の打ち上げ場へと暗闇の中を急ぐ。男衆が素手で花火を抱きかかえて打ち上げる勇壮な手筒花火は、ここ東三河地方だけに今も残る伝統行事の一つで、初めて目にする方々を驚かせた。
　以上でこの日の行事は終了。野趣あふれるバーベキューと、たっぷりのお酒は、十分に参加者の胃の腑を満足させたと思う。

■クライミング部

　中世古当支部事務局長が担当したクライミングの部は、本部青年部の若手会員（K2登山隊の山本隊長ほか十余名）と一部女性も加わっての若手クライマーが中心で、第一日目は人工登攀壁ブッポーウォールを使ってのクライミングを楽しんだ。
　パネルディスカッションも終わり、懇親会の開宴直前には、全参加者の注目の中、東海支部の選ばれた精鋭五名のクライマーが、リーダーの号令で一斉に壁にとりつき、デモンストレーションを行い、見事全員完登し、満場の拍手喝采を受ける一幕もあった。
　翌日は、バスで近くの鳳来湖畔の天然の岩場に行き、フリークライミングで汗を流した。（参加三十名）

■記念山行・明神山、鳳来寺山

　十月六日晴。A班・明神山は横田リーダーのもと六十名が車に分乗し、八時に出発する。
　登山口には広い駐車場がなく、山に登る前に世話係は大変な苦労をしたようである。やせ尾根の登降は鎖場あり、梯子あり、片側は断崖絶壁と、景色に見とれる暇もなかったであろう。
　好天にも恵まれて奥三河の山のよさを少しは味わっていただけたであろうか。
　一方、B班の鳳来寺山は山田リーダーの案内で、各支部の長老方と女性の参加で二十五名が表参道の千四百二十五段の石段登りから始まった。
　鳳来寺本堂前で小憩の後、奥の院、山頂三角点と順調に登り、天狗岩の展望台で昼食をとる。鷹打場の岩峰上で遠く南アルプスの山々を眺望し、三つ目の東照宮に参拝して、往路の石段を談笑しながら下り、記念山行を無事終了した。

（実行委員長・長坂　博）

追悼

林田正幹さん

―山の友よ―即興的に

石田喜八

♪いつかある日
　山で死んだら
　古い山の友よ
　伝えてくれ

あれは八月
秋にもう一度ヒマラヤへ行き
六千米に挑戦して来ると
電話口で逸っていた友。

♪伝えてくれ
　いとしい妻に
　おれが帰らなくても
　生きていけと

一度すっかり山を止めて
ニトロを持つ身になったと
冗談まじりに言っていたのに
やっぱり山を離れられなかった友。

♪息子たちに
　おれの踏跡が
　ふるさとの岩山に
　残っていると

明日を築き業界をリードする

コンクリート製品の総合メーカー

前田製管株式会社

本社／酒田市上本町６－７

☎（0234）23－5111

わが家の壁の
元日の穂高の写真は
二人共三十五年前の
若いままだ。

♪友よ山に
　小さなケルンを
　積んで墓にしてくれ
　ピッケル立てて

富士山が好きで
大勢の人を連れていった友
自然への労りに尽くした友
みんなの胸にケルンは建っているよ。

♪友に贈る
　おれのハンマー
　ピトンの歌う声を
　聞かせてくれ

いつも鷹揚な口調で
山の楽しみを語っていたのに
果然晩咲きのヒマラヤで
山の向う迄行ってしまった友よ。

これからは親しい仲間と
小さな山へ登り
麓の温泉でゆっくりしようと
何回も話していたのに——合掌。

一九九六年十月九日
アイランドピークの悲報に接して

海外の山

若き シェルパの 生と死

江本嘉伸

登山の記録には気をつかっているつもりでも、見落としはしょっちゅうある。最近も「彼は、この秋雪崩で帰らなかったんですよ」と友人に指摘され、絶句した。

シェルパのロブサン・ザンブーのことだ。

国際会議の裏方のことを近年「シェルパ」と呼ぶ。「共同コミュニケ作成のためにシェルパ会議が開かれ……」といったふうに新聞に登場する。補佐をする、あるじを助ける、という意味で「シェルパ」という呼称になったのだろうが、登山をやる者の耳に違和感があるのは、裏方といっても、それぞれの国ではトップクラスの高級官僚で、ヒマラヤで活躍しているほんもののシェルパのステイタスとは、全く違うからだ。

知られているとおりシェルパは、「シャル（チベット語で、東の意）パ（人）」から来た名で、かつてラサの東に住んでいたチベット人が中世初期にエベレスト周辺山域に移住した民族のことをさす。ソロ・クンブー地方の三千メートル以上の高所に住んでいるが、登山に関わりはじめたのは英国隊がエベレスト登頂をねらって活動をはじめた一九二〇年代以降のことだ。

以後、シェルパは人類のヒマラヤの高峰への挑戦の歴史で、はかりしれない重要な役割を果たしてきた。しかし、そのステイタスは、本質的には低いままだ。それでいいのか。そう自問するシェルパも出てきた。なかでも、ロブサン・ザンブーは最近、注目される一人だった。

二十五歳の若さでエベレストに四回無酸素で登っているザンブーは、「シェルパのプライドをかけて」積極的に登る新たなタイプだった。これまでのシェルパにはあまりなかった野心家といってもいいかもしれない。エベレストにも無酸素というだけでなく、羽毛服の上に特製の「空手着」をつけて登ったり、「頂上でのビバーク」を計画したりした。

そのザンブーが九月二十一日、エベレスト・ローツェ・フェースを日本の若手を代表するクライマーの一人、小西浩文（三四）とともに登っていて雪崩にやられた。小西自身は一五メートル下にいて難を逃れた。二人はドイツの国際公募登山隊に加わって、独立したパーティーとしてエベレストを無酸素、速攻で登るつもりだった。

ロブサン・ザンブーは、難波康子らが登頂後、遭難した今年五月十日、スコット・フィッシャー隊のサーダーとして四度目のエベレスト登頂を果たした。しかし、先頭に立ってルート工作をせず、もっぱら最後尾で隊の中で知名度が高く注目されていた女性を引っ張り上げることに専念したため、ロブ・ホール隊のジョン・クラカワー（登頂し、無事下山した）が、当日の模様を詳細に報告した記事の中で批判した。

先々月号のこのコラム「エベレストの真実」の中で、クラカワーのこの記述を紹介し、ザンブーについて「多額のボーナスを期待して、と推測された」と、筆者は書いた。しかし、のちにザンブーが「もっとも弱い隊員を助けただけで、金は正規の報酬以外全く受け取っていない」と反論し、クラカワーはこの点については謝ったことを知った。ロブサン・ザンブーの名誉のためにもう一度書こう、と思っていた矢先、彼の遭難を知り、絶句したのである。

ザンブーは、昨年十一月のゴーキョでの日本人トレッカー雪崩遭難の際にも、捜索活動に献身的な活躍をした。

勇敢な若きシェルパの死を悼む。

REPORT　報告　REPORT

二日間みっちり訓練
岩登り技術研修会

青年部・学生部・指導委員会

十月十九〜二十日、富山県立山町の文部省登山研修所において各委員会共催の岩登り技術研修会を開催しました。

文部省登山研修所の講師をここ十年ほど務め、また指導委員会委員を七年間務めてきた私が、指導委員会担当の理事となって真っ先に頭に浮かんだ方針とは、登山研修所の施設とそこに関わっているスタッフを委員会活動にいかしていきたい、というものでした。

確保技術の訓練をするＫ２登山隊の稲葉英樹会員ら

わが国において約四百種類のスポーツ種目がある中で、国家がその専門の研修機関を持っているのは登山だけです。また世界中を見渡しても、国立の登山研修所は、有名なフランスの国立スキー登山学校を含めていくつもありません。そしてわが国の文部省登山研修所は、素晴らしい施設・設備と素晴らしいスタッフに恵まれており、登山技術を向上させるための研修を行う場としては、ここ以上の場はないとも断言できるのです。そして、私が指導委員会担当理事になって以来、主催する研修会はすべて本会会員で登山研修所主任講師の山本一夫氏の実技指導と、同じく本会会員で登山研修所専門員の柳沢昭夫氏の助言をいただきながら行ってきましたが、今回は初めてお二人の指導とあわせて研修所の施設を使用しての実技研修会開催となったのです。

今回は岩登りにおける確保技術の研修会です。確保において基本となる物理学的理論は、ニュートンが万有引力の法則を発見してから不変であっても、それを実際のクライミングの場で発揮する技術・方法については試行錯誤や新しい用具の開発により日々進歩していくものです。

とくに大自然の中で行うアルパインクライミングにおいては、墜落の際の衝撃荷重をより少なくするために制動確保を行うことが不可欠ですが、一方では墜落距離をより短くしなくてはなりません。この相反する二つの行為を、最良のバランスで同時に、しかも瞬時に行わなくてはならないため、その二つの要素に直接かかわる落下係数（垂直落下距離／繰り出されたロープの長さ）が最小となるようにランニングビレイをとっていくという技術、いわゆる『トータルプロテクションシステム』を構築することが最も重要となります。

実際に本番のアルパインクライミングにおいて、トップの墜落を確保技術によって止めるという経験はめったにできるものではありません。しかし登山研修所にはウインチで吊り上げられた重さ六〇キログラムのタイヤを様々な落下係数の状態で自由落下させ、それを各々の確保技術によって停止させた際の衝撃荷重および反応時間がコンピューターによって計測できる設備があります。研修生は基本的な技術理論の講義を受けたあと、二日間にわたってこの施設を用いた訓練をみっちりと受けました。

あいにくの二日続きの雨も、研修生の士気を萎えさせることなく、全国から集まった大学山岳部現役部員十三名を含む参加者二十名は、参加費用とかけた手間を遥かに上回る大きなお土産を持って帰ってくれたものと確信しています。（熊崎和宏）

平成八年度上期新入会員
オリエンテーション

総務委員会

十月二十六日、当会ルームにおいて、本年度上期新入会員のオリエンテーションが、二十七名参加のもと

開催された。対象は百三十四名（会員番号一二一九四〜一二三二九）だった。

中川武常務理事の挨拶に始まり、村木潤次郎会長より歓迎の言葉として「当会は積極的に参加してこそ楽しく有意義に過ごせるところ」と述べられた。特別講演は松田雄一評議員が「ヒマラヤを越えるツル」と題して、ツルの神秘的な生態をスライドを交えながら話された。その他、日本山岳会の組織、図書室の利用方法、同好会などの案内がなされた。

ルームの前に勢揃いした平成８年度上期の新入会員

会員の自己紹介と意見交換では、入会の動機、今後の抱負などが語られた。

その後の懇親会は、村木会長を交え、さらに一歩進んだ交流がなされた。新入会員は同期会での再会を約束してお開きとなった。（高原三平）

平成八年・夏

上高地インタープリター

自然保護委員会

「山の自然学研究会」のメンバーによるインタープリター活動三年目の今年は、失敗も含めて多彩な体験ができました。参加したインタープリターは十八名。内容としては、簡単な説明から丸一日の案内など、いろいろなレベルがありましたが、参加者は延べにして二千人以上になったようです。

ただ会員の利用はあまり多くありません。会員は、自分の登山計画により、山研を中継地点として利用することが多いからだと思います。私たちの活動が、会員サービスの方向か、一般客への啓蒙活動になっていくのかわかりませんが、今後も続けていきたいと考えています。

利用者にアンケートを行いました。その結果は、よいと思った人のみが答えている可能性もあり、評価がよいからといって満足するわけにはいきません。希望者にはアンケートの結果をお分けします。

今回は新しい試みとして、「山の自然を語る夕べの会」と名付けた談話会（アットホームな講演会）を企画しました。初めは山研だけでの開催を考えていましたが、ここまで足を運んでくれる人がいるか不安でもあり、ＰＲの問題も気掛かりでした。温泉ホテルの青柳専務に相談したところ即決でロビーを開放してくださることになり、山研と温泉ホテルで交互に二十回、十九時三十分〜二十一時まで実施することができました。ＰＲも上高地中のホテルが協力してくださり、この企画は成功だったと思います。

談話会のスケジュールと実施内容、演者は右表のとおりです。

（大森弘一郎）

「山の自然を語る夕べ」実施内容

（1996年８月）

回	日	会　場	テ　ー　マ	演　者
1	3日	温泉ホテル	上高地はなぜ美しいのか	古田　寛昭
2	4日	温泉ホテル	上高地の自然の楽しみ方	駒場さくら
3	6日	温泉ホテル	上高地の植物の声が聞こえますか？	若林　和司
4	8日	山研	北アルプスの岩の不思議	那須野　功
5	9日	温泉ホテル	上高地からタイムスリップすると	小野　有五
6	10日	温泉ホテル	生物の多様性について	古田　寛昭
7	12日	温泉ホテル	氷河期の北アルプス	大森弘一郎
8	13日	山研	自然の多様性	西村智磨子
9	14日	温泉ホテル	ヨセミテより美しい上高地	大森弘一郎
10	16日	山研	竹と笹のものがたり	井上　希夫
11	18日	温泉ホテル	焼岳をわすれないで！	畑中　耕一
12	20日	温泉ホテル	美しい上高地をいつまでも	古田　寛昭
13	22日	温泉ホテル	鹿島槍と上高地の自然保護	菊川　忠雄
14	23日	山研	ライ鳥ものがたり	埴埼　滋
15	25日	山研	北アルプス今昔	小宮山和也
16	26日	温泉ホテル	自然保護との共生	木内　護
17	27日	山研	蝶ヶ岳から北アを考える	関　清
18	29日	山研	上高地の植生観察	白木　幹司
19	30日	温泉ホテル	自然にとけこみ調和するには	末松日出雄
20	31日	温泉ホテル	上高地とヨセミテの有害動物	秦　和寿

一九九二年同期会

上高地・第三回懇親山行

十月十二日夕方、全国から十一名の有志が三々五々、山研に集合しました。手作りの鍋料理を囲みながら、和やかな雰囲気の中、各人の近況報告や会の在り方などに話が弾み、時間のたつのを忘れるほどでした。

翌十三日は案じられた天候に思いのほか恵まれ、記念撮影の後、次回の再会を期しつつ、全山紅葉の焼岳・乗鞍、あるいは上高地散策グループにと分かれ、思い思いに中秋の一日を楽しみました。

なお次年度の幹事は従前からの田上、高橋両会員に加え、召田、坪山、藤井、大貫の各会員にお願いすることに決まりました。後日詳細な活動案を『山』などを通して提示いたします。

（萩田　實）

第三四三回・三水会現地集会

笠取山ー雁坂峠

十月十二日、高尾発甲府行き電車で塩山へ向かう。降水率五〇パーセントを超える予報が当たらないことを祈る。新地平でバスを下車、雁峠へと向かう。左右の樹木の紅葉が、上へ登るほどに美しさを増してくる。心配された雨も降らず、二時過ぎ雁峠に着く。ススキの穂が茂る草原である。荷物を置いて、笠取山への急な登りをあえぎあえぎ進む。雲が出て頂上の眺望はない。下って東京都の水源である水干（みずひ）神社をお参りし、笠取小屋十六時四十分着。

夕食が始まって宴酣のとき、屋根をたたきつけるような雨になった。私たちは雨に遭わずに小屋に泊まれて幸いであった。

翌十三日、小屋の前方に大菩薩の大きな山容が姿を見せる。今日は天気に恵まれそうだ。朝食ののち、雁峠より古礼山、水晶山へ登る。先月の台風の爪痕か倒木が多く歩きずらい。でも乾徳山、黒金山、国師岳とその稜線を左手に見ながら進む。

十一時雁坂峠着。まあまあのペースで歩いてきた。昼食後ナメラ沢を経て久渡沢の広瀬へと下る。ちなみに雁坂峠は三伏峠（南ア）、針ノ木峠（北ア）とともに日本三大峠とか。

久渡沢付近は雁坂トンネルが完成しており、大分様変わりしている。秩父方面からの登山も便利になることだろう。広瀬よりバスで塩山に出て解散。有志は恒例の反省会を八王子で行う。天候に恵まれ、紅葉の秩父が満喫できた有意義な山行であった。参加者十二名。

（樋口公臣）

日本山岳会のNGO活動

シバプリの丘の植林

自然保護委員会

カトマンズからランタンリルンの方角を見ると、白い山の手前に丘が連なっています。これがシバプリの丘で、そこからはヒマラヤの遠望が楽しめます。この登山道の途中から谷を隔てて右に礼拝堂があり、その周辺は裸地が広がっています。

私たち自然保護委員会では、ヒマラヤ登山でお世話になっているネパールでの有意義なNGO活動は何かを考えてきました。そして、日本山岳会にふさわしいNGO活動として、ラリグラス植林を計画し、ネパールの国花であるシャクナゲを植える適地を探していたのです。十数か所を調査して見つけた二か所のうちの一つがシバプリの丘でした。

我々の基本的な考えは、ネパールの植林促進に役立ちたいというものです。具体的には、その山にある稚樹を採取して裸地に植えるという方法です。これなら場所を選びませんし、もともとの植生を変えることなく樹木を増やすことができます。

地球環境基金の助成も得て、今年から植樹を始めました。七月にはネパールの日本語学校の生徒たちに作業を手伝ってもらい、〇・五ヘクタールの地にラリグラスやサクラ、シリスなど七百本の稚樹を植えました。いずれこの丘全体を稚樹で満たすつもりですし、もう一か所の適地にも植林することを目標にしています。

十月に植樹の活着状況の調査と苗の採取に行きました。実生苗は現地で苗床で育てます。種子は屋久島の野生植物研究所で発芽させて育て（二年かかる）、土を洗って殺菌し、ネパールに戻す計画です。

来年の植林は五〜六月に予定しています。関心のある方の参加をお待ちしています。また、助成金を得ているとはいえ、資金が潤沢というわけではありませんので、ご寄付など資金面でもご協力いただければ大変ありがたいと思います。

ネパールに日本山岳会のシャクナゲの山ができるときが楽しみです。

ゴラパニのラリグラス調査と保全活動も計画して実行しています。

（大森弘一郎）

次代に残そう美しい山と渓

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします）

カット　中村あや

福島・群馬・新潟三県による尾瀬総合学術調査について

斎藤　晋

今、尾瀬地域において、総合学術調査が行われている。今回のは研究費を自治体が出しているという点で、これまでのとは違っている。その経過などについて、紹介しておきたい。

一九九二（平成四）年八月四日、福島・群馬・新潟県の三知事が、尾瀬沼畔に集い「尾瀬サミット」が開かれた。そして、尾瀬保護財団の設立や総合学術調査の実施など、いくつかの構想が打ち出された。

これを受けて、群馬県教育委員会文化財保護課が事務局となり、総合学術調査計画検討委員会を設立。そして、一九九四年四月、「尾瀬総合学術調査団」を編成した。調査期間は一九九四年度から四か年で、第四年度は報告書作成となっている。

調査団の構成は、

大島康行（早大）植物生態学、代表
阪口　豊（専修大）自然地理学
西条八束（名大名誉教授）地球化学
樫村利通（福島大）植物生態学
岩熊敏夫（国立環境研）陸水生態学
鈴木郁夫（新潟大）地形学
林　秀剛（信州大）陸水生態学
斎藤　晋（群馬県女大）動物生態学

また、オブザーバーとして、

花井正光（文化庁文化財保護課）
大橋敏行（環境庁自然保護課）

の両氏が入っている。

尾瀬の総合調査といえば、既に、一九五〇（昭和二十五）年から三か年の第一回と、一九七七（昭和五十二）年から三か年の第二回がある。

今回のメンバーの、大島、阪口、樫村、西条、林氏は前回のメンバーであるし、前回のメンバーの研究室で育った者もいる。したがって内容的に今までのものを引き継いでおり、第三回の総合調査ということになる。

調査項目を分野別にあげると、次のようである。

●湿原のCO_2、CH_4の動態、湿原の植生変化、微地形と植物群集
●湿原と周辺の無脊椎動物相、土壌動物の密度と現存量、土壌動物による群集代謝と落葉分解
●地学的にみた湿原の形成と変遷過程、現在の岩屑地の地形形成、最終氷期以降の尾瀬ヶ原周辺の地形形成
●湿原の泥炭プラトーの形態と発達、泥炭層の水理、湿原の水循環、池塘の物質循環と環境変遷、生物多様性からみた池塘群の機能

＊

第二回の時からすでに十七年経過しており、この間のいくつかの変化も観察されることが期待されている。最終年度の終りころには、報告書の完成が見込まれている。また、一般向けの本の出版やシンポジウムの開催も予定されている。

遥かなり『天上倉山』

岡田光行

辞書によれば「天上」とは、①天の上　②空　③天上界　④天に上ることとあり、天上界のことを『①天にある世界　②仏教では、欲界の天と、色界・無色界との総称』とある。「天上天下唯我独尊」は、お釈迦様の言葉だが、秋田県は奥羽の辺境にあるここが、なぜ、「天上倉」なのか……などと、訳のわからぬ御託をならべながら、平成八年八月八日は、大安吉日、末広がりの、誠にめでたい一日であった。

八・八・八に因んで八八八メートルの山をと、血眼になって探しだしたのが「天上倉山」（標高八八七・六メートル）。標高は四捨五入でかんべんしてもらうことにした。某氏の記録によると一時間半の行程とあったため、三時ごろには戻れるだろうと見込んだが、俗人の願いは天上には通じなかったようだ。

午前九時三十五分、萩形キャンプ場駐車場で結団したあと、秋田支部の面々は悪路に耐えられる車に分乗、登山予定地を目指した。萩形沢の林道を遡り、車の進入限界まで進んだが、取付きが分からず十分ほどロスした。

鳩首会談（？）の後、天上沢近くの小沢を遡ることにした。急峻なうえに崩れやすい斜面と、身の丈を越す草藪の中をあえぎ、五一〇メートルの小さなコルにでたのが正午近い。

今度は、進路を北にとってピークを目指すことになるのだが、密集した笹竹に阻まれてなかなか進めない。中腰になって笹竹や枝草をかきわけ、三角点に到達した時には午後一時をまわっていた。

蒸し暑さと、草いきれの中での行動だったため、全員、汗びっしょり。頂上での気温が二三〜二五度では、なかなか汗も引かない。それでも、思い思いに藪を刈り払って車座になり、恒例の昼食兼宴会が約一時間。樹間からは太平山系の裏側を見ることができ、滅多に見られない光景に感嘆の声がしきりだった。

下山は、先のコルから尾根をさらに南に伝い、林道最奥への下降を目論んだが、「歩くための道」が皆無であり、どうしても、沢に引き込まれてしまい難渋した。幸い、経験豊富な柳田会員の適切なリードによって、数本の沢を越えながら、最終的には、登った時の沢のすぐそばの林道に飛び出した。この時すでに、午後四時四十分。実質五時間の行動は、古希を迎えた体にはかなりこたえたが、「こだわりとあやかり」の山を無事に終えた喜びは、参加者全員の温かい絆によるところと、感謝の気持ちでいっぱいである。

「天上倉」の名前の由来は知る由もないが、下山時にみた「ミズ」の群生や、時おりみる山菜の名残、ブナやナラの大木とそれに寄生する数々の自然の恵みを、天上界の倉として下界の人々が崇めていたのではないだろうか。「倉」は五穀を納めておく建物をいうが、まさしく、山の恵みを納めておく、しまっておくところに相応しい山であったような気がする。そして、永遠に天上遥かに、まさしく「欲界の天と、色界、無色界の世界」として穏やかに鎮座して欲しいと、願ったところである。

疲労困憊の体に鞭打って無事帰宅できたのも、天上倉山のご加護かもしれない。久々にハードに、そしてほのぼのとした山行を楽しんだ。計画してくれた佐藤昭義会員に、心から感謝申し上げる。（秋田支部長）

英国山岳会を訪ねて
―一九九六年五月―

芳賀孝郎

私は学生時代、THE ALPINE CLUB（英国山岳会）創立百周年（一九五七年）記念晩餐会に出席して帰られた松方三郎先輩のお話を聞く機会に恵まれた。私はこの時から、いつの日かアルパインクラブを訪ねてみたいと思い続けてきた。

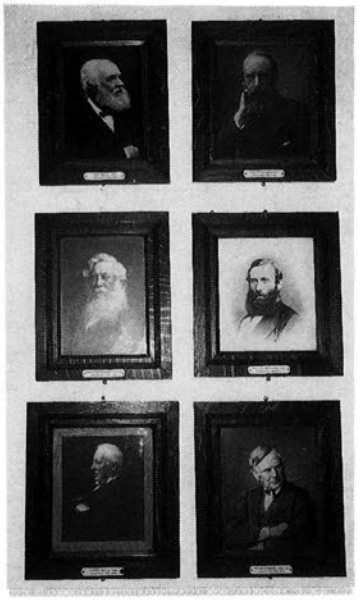
一八五七年十一月六日、バーミンガムに近いマシウ家に、アルプス登山をした仲間二十八人が集まってアルパインクラブを設立した。英国山岳会が、国名をつけないでただアルパインクラブ（AC）としたゆえんは、それが世界最初の山岳会だからである。

ACは一八〇〇年代にアルプス黄金時代を築き上げた。続いてコーカサス、ロッキー、アンデス、そしてヒマラヤへと、大きな登山実績を残し、世界の登山界をリードしてきた。一九二一年から始まったエベレスト登山は一九五三年、ついにハント隊により登頂に成功したことは周知のとおりである。

松方先輩によると、一九五七年十一月六日、AC百周年記念晩餐会当時の会長はサー・ハントであった。日本から参列した槙氏と松方先輩（AC会員）はドレスに白タイ（晩餐会の盛装）のサー・ハントに迎えられた。槙氏と松方先輩は略式のディナージャケットに黒タイであった。

会長サー・ハントの挨拶の中で、遠い日本から参列した槙氏と松方先輩に歓迎と感謝の言葉が述べられた。会員の他に二十数か国の山岳会代表も参列していた。会長の客としてシェルパ・テンジン氏の顔もあり、四百名に及ぶ男ばかりの会は誠に賑やかだった。ACは当時婦人会員は認めていなかったばかりか、正式の集会にも夫人同伴はなかったのである。

松方先輩の印象に残ったことは、ヒマラヤのパイオニアの一人である長老、トム・ロングスタッフ（当時八十二歳）氏が五十周年記念に出席し、今回の百周年にも元気に出席していることであった。彼は日本を訪ねたこともあり、槙氏と松方氏には特別親切に話しかけてくれた。ロングスタッフ氏のAC入会の推薦者は日本でお馴染みのウエストン師であるところが面白い。



AC事務所壁面の歴代会長の写真

私の長年の夢であったAC訪問は、本年五月の連休にロンドンの娘宅を訪れた時に実現した。娘に電話でACルーム訪問の予約をとってもらった。オールド・ス

トリートから入ったシャーロット・ロードにある古い三階建てがACの建物である。階段を上がると、二階の事務所前の壁には、歴代会長の写真が二面一杯に飾ってある。威厳に満ちた昔の会長の顔が、時代とともに親しみのある顔になり、服装も近年になるにつれカジュアルになっている。写真をよく見てみると、四代前の会長は女性であるとわかった。チャールス・エバンス夫人であるという。五三年のエベレスト隊員・チャールス・エバンス氏はその十代前の会長であり、夫婦そろってACの会長を務めたことになる。女人禁制のACにも女性が入会できるようになったと聞き、ACも時代には勝てなかったと、私は愉快に思った。

二階の正面に事務所があり、二人の女性が働いていた。一人はスイスからのボランティアであった。事務所の左奥に図書室があり、専門の職員が一人いた。その図書室には、英国の登山の記録が保管されていた。例えば、ウインパーの登山日記など、膨大なものがあった。世界各国の山岳関係の本の中に、日本山岳会の「山岳」も一号からすべてそろっていた。会員の要望により、希望の本や登山記録の調査などはコンピューターで対応するシステムになっていた。ヒマラヤン・インデックスはインターネットでアクセスされていた。南極のスコット隊や、第一回のエベレスト登山隊の当時の新聞記事などが、スクラップされ保存されていたのを興味深く見ることができた。

女性職員のシーラ・ハリスンさんに案内をしてもらい、三階に上ると小講堂があった。毎週火曜日に集会が開かれているという。私が訪問したのは水曜日であったので、この集会には顔を出すことができなかったが、ちょうど展示されていた一八〇〇年代のアルプス登山の記録写真を見ることができた。希望者には写真も販売していた。小講堂の奥にはバーがあり、会合のある日には専門のバーテンダーがきて、カクテルを作って会員にサービス(有料)をしているという。バーの壁には、ロングスタッフ氏が使っていたようなシャフトの長い古いピッケルやザイル、山の道具などが飾られていた。

訪問を終え、外へ出た私は、改めてACの建物を振り返ってみた。オールド・ストリートは古い町並だが、中でもそれは一際古くてとても小さい。そしてそこには七つの大陸で活躍した探検家や登山家の偉大な歴史が脈々と流れていた。数時間ではあったがその一端に触れ、その中に身を置くことができた幸せをかみしめながら帰路についた。

感動を求めて
―マッターホルンにて―

砂田定夫

馬車馬のように走り続けてきてふと立ち止まると、流れてゆく時間の中に何か欠けていると思うことがある。特に若いときのような新鮮な感動が少なくなったように思う。感性を高めるように努めれば感動が得られる機会も多かろう。何かを達成すればそれ相応の感動はある。だが、日常の中にインパクトのある感動がどれ程あろうか。悟りきれない自分はそれを山に求めてみる。一応の目標を定めてピークハントや地図の朱線引きで〝山のコレクション〟を試みる。それも達成感は得られる。しかし、あまりロングレンジな目標はすぐに達成できないという不満がある。既に中高年に達した岳友などからの頼まれリーダーを引き受け、彼らの喜ぶ顔を見て満足感を味わう。

だがもっと自分の中に新しいことへ挑む意欲を失いたくないという気持ちがある。永いこと多様な形の山をやってきた自分として、何か刺激剤が欲しい。一方では年齢とともに感じる体力の減退という現実があるが、自分の限界を見極めたいという気持ちもある。今の自分の力を分析してみる。ヒマラヤのビッグはとてもと思う。体力のほかに時間、資金と障害は多い。本職と趣味を両立させるという考え方はこれからも変えたくない。あれこれの条件をぎりぎり満たす山を探してみた。かつて青春の血を沸かせてくれたアルピニストたちの初登頂・初登攀の舞台となったアルプスならどうだろう。そこの地名や山名には懐かしい響きがある。そんな想いに駆られるように彼の地へ出かけ、古典的なルートから二つの名峰に登った。

昨年はグリンデルワルトを訪れ、アイガーの狭い山頂で初登攀に輝いた先人の感動に想いを馳せた。今年はツェルマットをベースに、もう一つの夢だったマッターホルンで自分を試してみた。一人だけの〝遠征〟の中で「もう少し若ければもっと面白い登山が」という欲がないでもなかった。「いや俺はある時期仕事を目一杯やった。過去に悔いはないぞ」と考えを陽転させる。

さて登頂の日、未明のヘルンリ小屋を出発し、ソルヴェイ小屋に着くまでに四十五分も早く出発した日本人パーティーを次々に追い抜いてちょっと優越感に浸る。職業として何度も登降する現地ガイドとはその登り方もスピードも歴然と差がある。ガイドレスで登るクライマーから見

山の切手15

クルト・シュロッサー

相山之良

ドイツの登山家クルト・シュロッサーについては、切手カタログに、ナチの犠牲になったスポーツマンと記されているだけで、それ以上のことは長い間分からなかった。

切手同好の士で、本会会員の開発秀三さんに尋ねたところ、ドイツ切手専門の加藤健一さんにご連絡いただき、「東ヨーロッパ切手人名録」に、「一九〇〇年ドレスデン生まれ、本業は家具製作、徒弟時代に右手の半ばを失ったが、熟練したクラフトマンにして登山家。家具労働者組合の議長を務め、三三年ドレスデンの反ファシスト登山者クラブのメンバーとなる。エルプザントシュタイン山系で地下活動に入りレジスタンスに参加、四三年十二月ナチに逮捕され、四四年八月死刑執行」とあるのを教えられた。さらに開発さんは松田雄一さん（前副会長）に、松田さんは五九年のヒマール・チュリ遠征で一緒だった山野井武夫さんに、山野井さんは立教大学山岳部OBの縁で、ドイツ文学の福田宏年さん（元立大教授、山岳部長）に、友情の輪のリレーでお問い合わせくださった。

福田先生は、昔から昵懇の仲であるオーストリアのアルフレート・ニンマーリヒター氏（元ウィーンの労働者新聞スポーツ記者）に調査を依頼された。彼は、旧東独のことでもあり、調べるのは簡単ではないと言いながらも、「自然の友の会」など山岳団体に問い合わせたり、山の蔵書や写真集を広げて、シュロッサーが、統一クライミング部（略称VKA）を組織し、ザクセン・スイスにあるエルプザントシュタイン山で活躍したこと、VKAのコーラス指揮者をしていたこと、VKAの二百人の会員のうち八十九人が強制収容所に連行され、二十四人が虐殺されたことなどを調べあげてくれた。

また、フリッツ・モラヴェク氏（五九年のダウラギリ遠征隊長で、同年の日本山岳会ヒマール・チュリ隊の松田さんとは、カトマンズで面識があった由）に電話して取材の確認までしたという。モラヴェク氏は即座に「クルト・シュロッサーは、エルプザントシュタイン山で名の知れたクライマーだったが、ナチに殺されたんだ」と言ったそうだ。

たかが切手一枚のことで、これ程多くの諸先生、諸先輩に、ご多忙にもかかわらずお調べいただいたことに、大いに恐縮するとともに、誌上を借りて深く感謝いたします。本件に限らず、山の切手については、本会の会員というだけで、お会いしたこともない多くの方々に、懇切にご教示いただいていることについても、深甚な謝意を呈します。（了）

1963年5月27日、旧東ドイツ発行。左がクルト・シュロッサーの肖像。右のタブはエルプザントシュタインの岩壁でのクライミングを描く。

チベット高原走破の旅

竹内哲夫

八月五日から二十七日まで二十三日間の予定で、チベット高原四〇〇〇キロ余りを走破しようと、成田〜上海〜成都経由で、八月七日ラサ空港に到着した。

れば、自分にとって未知のルートを自力で登ることに価値があるというに違いない。ガイドは天候が急変する前に下山しなければ危険であるという鉄則を説くであろう。あるいは遭難の事例を挙げるかもしれない。誰もが自分の行為に価値観をもって、それぞれの思いで山に対峙する。

登りはクライマックスを迎える。東壁側から稜へ、そして北壁側へと急峻な岩場が続く。名ガイド、ミシェル・クロをはじめ四人が遭難した地点では、初登頂したウインパー一行の下山における恐ろしい場面を一瞬想像する。今し方の快適な登りに、アイガーより易しいな、などとの思いも束の間、アイゼンを着けた頃から急速に体が重くなり、登りが辛くなった。最後の雪の斜面を這い登って絶頂の一角に達した瞬間は、達成感や感動よりも辛い登りからの解放感の方が大きかった。

隊長は法政ＯＢの増田昌士さん、隊員は八十二歳でなおかくしゃくたる山岳写真家として著名な名誉・永年会員風見武秀さん、前福岡支部長吉村健児さん、立教ＯＢ中村太郎さん、明治ＯＢ石田要久さん、山想会長谷川英夫さん、すでにチベットを経験している小野寺要三さんと山口昇さん、それに私の計九人の構成で、平均年齢はおおよそ六十五歳といったパーティーである。

成都〜ラサ間は重畳たる山岳地帯で、ナムチャバルワ峰、ニェンチェンタンラ峰などの見える上空を飛ぶ。ラサ空港から約九十分でラサ市街へ到着。ラサホリデーインに入る。ヤルツァンポ川の橋のたもとに、着剣した銃を持った中国軍の兵士がいて、チベットの緊張した状況を印象づけられた。

ラサに二泊、デプン寺、ポタラ宮、大昭寺、八角街の市場などを回りながら高度順応を行い、本隊は八月九日シガツェ飯店泊。タルシンポ寺院などを訪れる。

現地ではトラック一台、ランドクルーザー三台、現地人はガイド兼通訳一名、ドライバー四名、コック一名、助手一名の計七名を同行し、総勢十六名で旅をすることとなる。トラックには、四台の四二〇〇キロ分のドラム缶、テント、食料を積む。

縦横独特の縞模様を持つ聖山カイラス

ラサでの二日目の晩から、私は熱と下痢のため、滞在を一泊延ばし、十日早朝、あらかじめ手配の車でシガツェへ行き、本隊に合流したが、ラサでカトマンズ診療所の女医・山根先生に診察していただいた。東洋医学の電磁波による診断との話だったが、手の親指と人差し指でリングを作り、その離れ具合如何による薬の効き目の判定方法はたいへんな驚きで、半日で完全に回復してしまい、以後全く快調だった。

■チャンタン高原

シガツェ〜ラーツェ〜ラカ〜ツォチェン〜ドンツォを経て、ゲルゼまで四日間、九〇〇キロ余の行程。途中三泊はテント、ゲルゼでは招待所を利用する。ラーツェ〜ドンツォ間は最近開設された道路のせいか、記載のない地図が多い。ラーツェではヤルツァンポの橋梁のほか、支流の渡河点にも、渡船に代わり新しい橋が架けられていた。

ラカからいよいよチャンタン高原の核心部へ入ることとなる。ラーツェ〜ラカ間はいくつもの峠を越えるが、ラカから先も高い峠が多く、五〇〇〇〜五四〇〇メートルの峠が次に現れる。敷きつめられたような礫に青草が生えた広大な草原、草原を区切る褐色の岩山、頂に雪を乗せた峰々。羊やヤクの群れと遊牧民、遊牧民のテント。チベット高原の一般的パターンがそれであるが、チャンタン高原では野生の馬、ロバ、キャン（鹿）に出合うこともある。ラカの先には、湯煙を上げるかなりの規模の間欠泉も見られた。

ゲルゼから二日間、約五〇〇キロ、再び草原と峠を繰り返し獅泉河に到

山と医療

役に立つ医療器具

滝　和美

登山に際しては１グラムでも荷物を少なくしたいのが本音であり、使うか使わないか分からない医療器材をいくつも用意していく気にはならない。私が実際に使ったり試用したりして、これはよいと思ったものを三つあげてみる。

一つは大型の“バンダナ”であり、救急処置の講義でも携行を勧めている。ハンカチ、ネッカチーフ、はちまきと使い、骨折時には副子固定に転用する。わざわざ三角布をザックに入れるのは気が重いが、１人２枚くらいのバンダナを持参すれば、パーティー分合わせると骨折時の固定分はもとより、全身も簡単に覆うことができる。

一つは昨年売り出された注射針型縫合器（21Ｇ＆18Ｇ：注）である。緊急時に１針だけ縫うために作られたもので、持針器やハサミは必要なく、指先で把持し針先で糸も切ることができる。２〜３本用意しておくと、緊急時の止血や皮膚の創部を一時的に閉鎖するのに有効である。

一つは新製のパルスオキシメーターである。従来型すべてに付属していたコードがなくなり、指先を入れるケースに電池が内蔵されており、指先だけの器具で酸素飽和度と脈拍数を測定できる。従来のものに比べ格段に軽くなり、使用勝手もよくなった。酸素吸入量の指標にも役立つ。

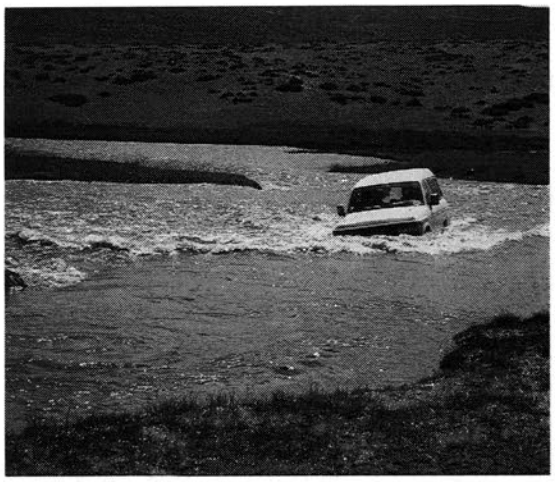
山の事故は予測できない。ＴＰＯに応じて使える医療器材の携行を考える際の一助になれば。

注）Ｇはgauge（ゲージ）の頭文字で、針の太さを現わす。数字が小さいほど太く、21Ｇは静脈注射の針の太さ。

着。西チベット最大の街であり、インダス川の源流に位置する。インド国境へ三〇キロ、カシュガルへの入り口である。

■グゲ王国遺跡

獅泉河から二八〇キロ、五五〇〇メートルの雪の峠を二つ越え、グゲ遺跡から一八キロのツァンダに向かう。次第に道路も川も判別がつかなくなり、さながら車による川下りの様相を呈する。一台のクルーザーが渡河しきれずダウン。他の車に分乗。二十四時、深夜のツァンタ招待所に到着する。後続のトラックがダウンした車を引っ張り上げ、ことなきを



河川が増水して渡河は困難を極めた

える。

翌日グゲ遺跡を見る。九世紀吐蕃王国の分裂の際建てられた王城と僧院の遺跡である。遺跡には仏像、壁画、岩窟などがあるが、仏像はツァンダのトリン寺などとともに、文化大革命時に破壊され、その後復元されたものだという。この地域全体の山々は砂岩で構成され、長い年月の間に風雨に削られ、山そのものが王城や巨大な仏像であるかと思わせるような壮大な景観である。

■カイラス山とマノサロワール湖

ツァンダから再び五〇〇〇メートルの二つの峠を越えカイラス山（六七一四メートル）へ向かう。二日目に聖山カイラス（カンリンポチェ）の麓へ到着。初めは雲に隠れていたが、辛抱して待つことしばし、白雪に横縞と縦縞の独特の模様を持った三角形の全容が現れた。チベット人は五体投地の礼拝を行う。私たちは幸運にもカイラスの全貌を見ることができたが、やがて雲に覆われてしまい、翌日以降もその姿を見ることはできなかった。

この日はチベットの三大聖湖の一つ、マノサロワール湖の畔に幕営。湖畔の小岩峰上の八世紀建立というチューゴンパに参詣。岩頂にはためくタルチョの色彩が鮮やかだ。

■ヤルツァンポ源流

ナムナニ峰（七七二八メートル）の裾を巻くようにして、ネパールとの国境の街プーランの招待所に宿泊。翌日、マノサロワール湖を経てヤルツァンポ源流へ向かう。

今年のチベットは十数年来経験しない異常気象だったという。全般に雲が多く、したがって雨（高所では雪）が多く、河川が増水して渡河が困難を極めた。チャンタン高原ですでにその萌しが見えたが、インダス源流部、グゲ付近、カイラス周辺と東に進むにつれ、河川の増水に悩まされる。ドライバーが川に車を乗り入れるのを逡巡する場面も見られた。

八月二十一日、ヤルツァンポ源流で大きな渡河を繰り返した後、パルヤン手前の支流の迂回ルート（九〇キロ）へ入ったところで、道路崩壊のため、やむなく渡河を強行せざるを得ない状況下で、遂にトラックを除く三台のクルーザーが、冠水のためダウンした。時刻も二十三時、翌日も懸命に整備したもののついにエンジンがかからず、やむをえず三台をその場に残し、以後パルヤン〜チョンバ〜サカ〜ラカ〜シガツェと約一〇〇〇キロをトラックの荷台に乗って帰る予期せぬはめに立ち至った。日程を回復するため、とくにサカ〜シガツェ間五五五キロは、早朝六時出発、翌朝四時到着という厳しい旅程となった。

＊

今回の旅はたいへんエキサイティングなものであったが、全員元気に、また一応予定した期間内に、主な目的地を回ってくることができたのは非常な幸いであった。今年の八月、チベットへ入ったパーティーのほとんどが、途中で断念して引き返さざるを得なかったと聞いたからである。

ニュージーランドの夕べ　●各会場共18:30〜20:30(入場無料)

■札幌会場	1/24(金)	りんゆうホール(東区北9条東2)	☎011-711-7106
■仙台会場	1/22(水)	仙台市民会館	☎022-262-4721
■東京会場	1/16(木)	中退金ビル大ホール(芝パークホテル並び)	
■名古屋会場	1/21(火)	名古屋国際センター3階	☎052-581-5678
■大阪会場	1/22(水)	大阪科学技術センター	☎ 06-443-5321
■広島会場	1/16(木)	広島YMCAホール	☎082-227-6816
■福岡会場	1/21(火)	アクロス福岡6階601号室	☎092-725-9113

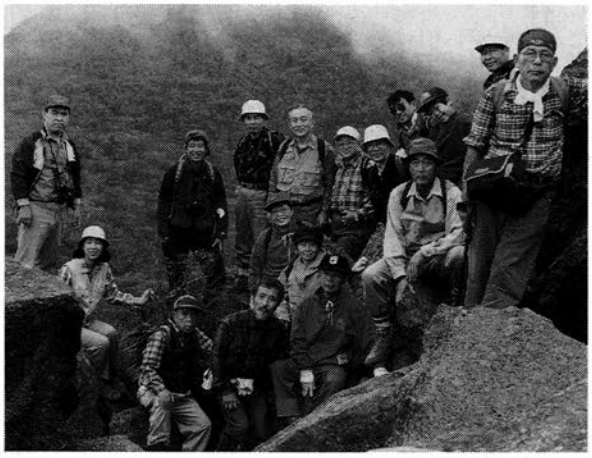
運輸大臣登録旅行業490号/日本旅行業協会正会員/IATA公認代理店
アルパイン ツアーサービス 株式会社
本社／〒105 港区新橋2-13-8 新橋東和ビル5階 TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06-444-3033　名古屋☎052(581)3211　福岡☎092(715)1557
仙台☎022(265)4611　広　島☎082(542)1660　札幌☎011(711)7106
(株)りんゆう観光)

JAC 支部だより

全国各地の支部から，独自の活動状況をリポートします。

熊本支部

秋季例会　九重・黒岳山行



錦繡の高塚を背景に黒岳・天狗山頂で

熊本支部が設立されて三十九年になるが、今まで百十六回の例会登山を実施している。そのうち地元の阿蘇山は十一山、十三回と多いのは当然としても、同じ「阿蘇くじゅう国立公園」に含まれる九重山群は、大船山、久住山（二回）、三俣山、中岳の四山、五回と少ない。それで今回は、深みゆく秋の黒岳の紅葉を訪ねることにした。黒岳は九重山群の東端にあり、他の山々がトロイデ型火山特有のまろやかな草原の山であるのに比し、押しつぶされたような形の広い山頂部まで、黒々と原生林に覆われている。それだけに秋の紅葉は素晴らしい。

十月十九日の夕刻、黒岳東麓の白水鉱泉「白泉荘」に十四名の会員が集合した。ここは豊富な炭酸水が湧出するので、早朝から車でこの水を汲みにくる人が後を絶たない。この夜は久しぶりに出席した人もいて、懇親会は差し入れの酒瓶を林立させて和気あいあい、大いに盛り上がった。

翌早朝、東麓からの縦走班四名は一足先に宿を出る。本隊の十一名はマイカー五台に分乗して、北側の男池（おいけ）へ向かう。男池は「日本百名水」に選ばれた豊富な湧水があり、多くの行楽客で駐車場は早くも満杯状態。

北から西へ回り込む深い樹林帯の登山道を一列になって歩く。このコース中、唯一の水場「かくし水」までは、ほぼ平坦な森林の遊歩道。やがて木の根、岩角を踏む急坂を登りきると、火口底のような小盆地「ソババッケ」に着いて一息入れる。見上げると平治岳と北大船の肩の辺りに陽光が差して、紅葉が一際美しい。

ここから「風穴」まで、大船山と黒岳との裾合谷を行く。アップダウンの激しい岩だらけの歩きにくい道だが、一時間余をかけてゆっくり登る。風穴にも多くの登山者がたむろしていたが、日帰りで先行した田上会員のメモを見つけて、小憩のあと胸を突く急坂に取りつく。山頂部火口跡「みいくぼ」の鞍部で田上ファミリー（寿美子夫人と六歳の長男叡一君）と合流する。

トランシーバーで縦走班と連絡を取る。何とすでに黒岳最高点の高塚（一五八七メートル）に着いていた。白水から三時間半の標準タイムを大幅に短縮して、駆け上がってきたらしい。マカルー登山隊に参加した馬場博行会員を中心にした熊本支部青年部？（ただし平均年齢五十五歳）のパワーに感心する。

本隊はそのまま岩峰の天狗（一五五六メートル）に直行するが、程なく縦走班も追いついてきた。天狗はまるで巨石のケルン。岩場のルートは登降する登山者で交通渋滞。エイ坊（叡一君）は子猿のように岩場を駆け回り、両親のハラハラをよそに登山者たちの人気を集めていた。

山頂着十一時半。少し早いが、風を避け、灌木の下に潜り込んでランチタイムとする。時折ガスがかかる天気だが、正面の高塚や眼下に広がる「みいくぼ」の樹海の紅葉が美しい。しかし、それよりも西側に大きく迫る大船山の山腹を飾る錦繡には目を見張った。

衆議院議員選挙の投票日で、不在者投票を済ませていない人もいたので、早めに全員往路を男池へ下る。懸念された空模様は下るにつれて次第によくなり、男池から帰路につく頃は雲一つない秋晴れになった。

（本田誠也）

岐阜支部

奥三界山・秋季懇親山行

十月十二、十三日、四十六名の大所帯で、裏木曾県立自然公園内の奥三界山（一八一〇メートル）で秋季懇親山行を行った。

十二日十七時、森のささやきが耳を澄ませば聞こえてくるような、静

かなたたずまいの川上村夕森の夕森荘に三十一名が集合。十八時からミーティング、今回のチーフリーダー森本一郎会員からコース概要の説明があり、続いて東京、京都、長野、石川、愛知など遠方からの会員・会友も交えて杯を酌み交わし、夜遅くまで懇親を深めた。

十三日、当日参加の十五名の会員が夕森荘で合流、車に分乗して八時に出発した。夕森から丸野林道の砂利道をゆっくり行く。イセ谷の最上流までの約七キロメートルに四十分も要した。

九時、登りにかかる。低気圧が東海沖をゆっくり通過するため、昼ごろまで雨が残るという予報であったが、朝から晴れ上がり、快晴に恵まれての登山である。

この辺り全域が国有林である。急坂を梯子で登って支尾根に出た。背丈一メートル余りの熊笹におおわれ、ところどころにはヒノキ、アスナロ、ネズコなど伐採を免れた自然林を見ることができる。

イセ谷の支流を沢沿いに登り、奥夕森の夕森庭園に着いた。池塘が点在し、景色のよい庭である。さらに登ると、ヒノキ、サワラ、コウヤマキなど木曾五木の生い茂った昼なお暗い針葉樹林帯に入った。その中にある小さな鏡池が、秋の柔らかい陽射しを受け、周囲の針葉樹や紅葉を水面に映し、静まり返っていた。

十一時に全員が頂上へ登った。森本リーダーの音頭で「ヤッホー」を唱和して昼食。展望台からは木曾の御嶽や、昨年岐阜支部で登った井出小路山を望むことができた。

十二時下山にかかり、十三時三十分登り口の丸野林道へ全員帰着した。

（清水芳彦）

奥三界山頂上に登った46人の大所帯

図書紹介

カット　中村あや

大森久雄・著『本のある山旅』

隔月刊だった『ビスターリ』誌に連載され、好評だった文が一冊にまとまって刊行された。永年本造りに携わった著者は文筆にも傑れ、山歴も豊富だから、ここに収められた紀行と随想二十九篇は〝本のある―〟を抜きにして、すでに見事な作品となっている。この中に挿入引用されているのが百数十名の著者の、数百篇で、紀行あり、随想あり、あるいは論文、文芸作品と多彩である。大森氏が本にまつわる旅をし、この名の本を出すに至った気持ちはまことに快い。

著者の文はその人柄のように穏やかで、細かい点の描写まで神経が行き届いていて、しかも無駄がない。それゆえ引用されている文もでき得る限り少ない部分にとどめてあり、効果的だ。近ごろの本の装丁は厚紙（実はもろい）と大きな活字のものが多いが、本書は全く逆で、とくにカバーになっている表紙をめくった中の表紙は、小さな活字の書名があるだけで、著者の名も出版社の名もなく、優雅さを感じる。巻末に〝書物の条件〟を書いている著者の指針もあったに違いない。どなたにもおすすめしたい一冊である。（川崎精雄）

一九九六年十一月　山と溪谷社発行　二八五ページ　千八百五十四円

『カラコルムにおけるイタリア・アルピニズム』Alpinismo Italiano in Karakorum

イタリアの遠征隊がアブルッチ侯指揮下でカラコルムに入ったのが一九〇九年。それ以来一世紀に及ぶこの山域でのイタリア人たちのK2やガッシャブルムなどでの活躍が、美しい写真とともに語られる。トリノにある国立山岳博物館での特別展のカタログを兼ねた冊子。ヴィットリオ・セルラが二〇世紀初頭に撮った写真が見事。（一九九一年刊　一二九ページ）。

K2:millenovecentocinquanta-quattro

同じシリーズとして一九五四年から九三年までのK2におけるイタリア隊の活躍が、写真、新聞、劇画などで再現発行されている。イタリア

風エスプリにあふれた造本となっている。　（宮下啓三）

（一九九四年刊　二一一ページ　国立山岳博物館・イタリア山岳会トリノ支部編集）

高田宏＝文・細川剛＝写真『ウェストンの森』上高地・島々谷の朝と夜

今年はW・ウェストンの名をよく耳にする。日本について書いたもう一冊の本「ウェストンの明治見聞記」が一種の日本人論の本として、また明治二十一年〜大正三年頃の日本を異邦人の目で見た写真集などが豊田市で展示され、話題を呼んでいる。上高地では毎年六月の第一日曜日に、ウェストン祭が開かれている。新緑のこの時期、渓は千万の若葉に包まれ、小雨に煙り、霧が流れる。

本書ではウェストンの歩いた、新緑の島々谷から上高地を「新緑の島々谷」から「いろいろな森」まで十一の物語にまとめ、写真は森の写真家——自然と人間の接点をテーマとする細川氏が三十一枚を掲載、ありのままの森を実に美しく撮っている。巻末に撮影ノートとあとがきがある。

本文は「ウォルター・ウェストンと歩く、きらめく森の物語」で氏の文章引用を中核に、古今東西の名著に話は及び、自然への想いはふくらむ。苔むした森の倒木を虫眼鏡を通して見るとそこに熱帯雨林があり、自然のいちばん繊細な手仕事は、小さなものの中に見られる。また深田久弥氏の「避衆登山」の話が出てきたり、山のエッセーとして詩心のあふれた好著と思える。　（三沢一三）

一九九六年十月発行　日本テレビ放送網㈱　一三六ページ　千五百円

安藤忠夫・編『東海山岳　第七号』

「東海地区の山の総合誌」を目指し、支部会員、会友延べ四十数名の執筆による、記録、紀行、研究、随想、図書紹介などからなる、A5判四〇〇ページを超す大冊が上梓された。

全体は五部より構成されるが、一部、二部は外国登山の記録などで、全体の約三分の一を占め、九本の研究論文が約三分の一、残りの三分の一が国内登攀、紀行、随想で構成され、支部年表や図書紹介も盛り込まれている。

クラウン峰、チリン峰のカラコルムの二つの初登頂の記録やエベレスト・サウスピラーの記録などが記されている。研究論文とはいえ肩の凝らない読み物としても楽しめる。

大半の原稿は、会員から自発的に寄せられたものという。このエネルギーと調和はどこから湧き出てくるのだろうか。さらにシリーズ化したという読み物の「いで湯の山旅」十六本など、支部会員相互間の余裕すら感じられる。　（柏木宏信）

一九九六年九月　日本山岳会東海支部発行　A5判　四〇五ページ　頒価三千二百円

上條　武・著『上高地——神河内絵画き宿』

上高地河童橋際に建つ五千尺ホテルは、大正四年（焼岳の噴火により大正池が出現した年）に開業したという。本書は、その創業者である井口良一の残した絵日記を基に、彼の半生を描き追想するとともに、この旅館の故事来歴を様々な資料を使って明らかにしようとするものである。

中央線に松本駅ができたのは明治三十六年で、それと同時にこの駅前に商人や旅の人を相手とする旅館がいくつかできたが、その一つに養老館があった。この養老館の別館として上高地に建てられたのが五千尺の前身であった。

創業者の井口良一は、若い時から画家になることを夢見、上京して黒田清輝の主宰する研究所に入り絵の勉強をしたが、結局は家業を継がざるを得ず、志し半ばにして松本に戻り、上高地別館（支店）の経営に携わった。この旅館が、いつの間にか〝絵画き宿〟と呼ばれるようになったとあるから、画家としての道を決して忘れたわけではなく、親元を離れて絵を続けようとしたのであろう、ともいえる。

旅館の経営からは、間もなく離れてしまうが、その後はいくつかの学校の美術の先生として生涯を送り、終生画をえがき続けた。また旅をしたときは絵紀行、日常の生活は絵日記に描いた。本書の第Ⅱ部に収録された〝高山絵紀行〟は、上高地から高山までの旅を絵と文で綴ったもので、前に単行本として出ている（銀河書房・昭和五十九年）が、ここに描かれた人物の表情にはなかなかの雅趣が感じられ味わい深く、交際のあった茨木猪之吉の人物スケッチを彷彿とさせるものがある。惜しむらくは、単行本の時からみると挿入されている絵がかなり省かれ、単色になっていることである。また彼は信濃山岳会会員で、山に登り山の絵紀行を残しているようだ。それは次巻で取り上げるとのこと、期待したい。　（岩瀬晧祐）

一九九六年四月　独木（まろき）書房発行　四六六ページ　三千八百円

図書室受入報告（1996年10月）

著　者	書　　名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
寺田和雄	わが山旅、まちだ文学散歩	315pp/22cm	町田ジャーナル社	1996	著者寄贈
豊田和弘	ひとりぼっちの叛乱：とうちゃん、巻機山に生きろ	221pp/19cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
自然保護年鑑編集委員会	自然保護年鑑[H7−8年版]第4巻:自然と共に生きる時代を目指して	462pp/26cm	自然保護年鑑刊行会	1996	発行者寄贈
高橋三雄（監修）	わかりやすいコンピュータ用語辞典	682pp/18cm	ナツメ社	1996	岩瀬泰郎氏寄贈
米田一彦	山でクマに会う方法：これだけは知っておきたいクマの常識	199pp/19cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
佐々木民秀・他(編)	ボルネオ島・キナバル登山報告書（1996. 01/10−18）	76pp/26cm	日本山岳会秋田支部	1996	発行者寄贈
早稲田大学岳友会(編)	小宇宙としての湖・仁科三湖を観る:第4回山小舎カルチャー報告書	66pp/30cm	早稲田大学岳友会	1996	発行者寄贈
日本山岳会信濃支部	パトニーヴェイルからの風(ウェストン祭記念講演集)：山脈に語る	278pp/19cm	日本山岳会信濃支部	1996	発行者寄贈
浅野孝一	関東霊山紀行：信仰の山歩き No.41	244pp/19cm	自由国民社	1996	著者寄贈
川村匡由・秋本敬子	いまからはじめる中高年の山歩き：その心得とおすすめ70コース	202pp/21cm	ミネルヴァ書房	1996	著者寄贈
古関正雄（編）	ダウラギリⅠ峰：ベルニナ山岳会・横浜ダウラギリⅠ峰登山隊'93	46pp/26cm	横浜ダウラギリ登山隊'93	1996	発行者寄贈
結核予防会（編）	思い出：秩父宮妃殿下	47pp/27cm	秩父宮妃殿下を偲ぶ会	1996	発行者寄贈
高橋サブロー	山と海の詩：我が心の山岳遍歴	343pp/20cm	東京新聞出版局	1996	著者寄贈
佐藤芝明	現代に活きる山の神伝承	246pp/19cm	丸ノ内出版	1996	著者寄贈
大森久雄	本のある山旅	285pp/20cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
本の出版社（編）	登山・ハイキング・バス時刻表（関東版・97冬春号）	28pp/19cm	書苑新社	1996	出版社寄贈
ウェストン展実行委員会	ウェストンの見た明治・大正の日本(L'Incanto del Giappone日本語解説書)	26pp	ウェストン展実行委員会	1996	発行者寄贈
Fosco Maraini (cura)	L'Incanto del Giappone / Walter Weston	131pp/21cm	M.N.M.	1996	杉本誠氏寄贈
M.N.M.(ed.)	K2:Millenovecentocinquantaquattro	211pp/21cm	M.N.M.	1994	発行者寄贈
M.N.M.(ed.)	Alpinismo Italiano in Karakorum	129pp/21cm	M.N.M.	1991	発行者寄贈
M.N.M.(ed.)	Museo Nazionale della Montagna [English ed.] (M.N.M.: Museo Nazionale della Montagna)	48pp/21cm	M.N.M.	1991	発行者寄贈
Jeff Lowe	Ice World : Techniques & Experiences of Modern Ice Climbing	256pp/23cm	Mountaineers	1996	購入
J.Bachar & S.Boga	Free Climbing with John Bachar	86pp/23cm	Stackpole Books	1996	購入
Robert Strauss	Adventure Trekking : A Handbook for Independent Travelers	254pp/21cm	Mountaineers	1996	購入
I.D.S.Thomson	May the Fire be always lit : A Biography of Jock Nimlin	210pp/21cm	Ernest Press	1995	購入
P.Ament & C.McCarty	High Over Boulder [5th ed.] : A Historical Guide to Rock Climbing near Boulder, Colorado	170pp/21cm	Two Lights	1995	購入
Jan Kielkowski	Cho Oyu Himal & Kyajo Ri Himal	152pp/21cm	Explo (Poland)	1995	著者寄贈
Harish Kapadia (ed.)	The Himalayan Journal (vol.52, 1996)	339pp/22cm	The Himalayan Club	1996	発行者寄贈
D.M.Richardson (ed.)	The Journal of the Mountain Club of South Africa (No.97, 1994)	200pp/24cm	Mountain Club of S.A.	1995	発行者寄贈

会務報告

十月理事会

日時　十月十七日㈭　十八時三十五分〜十九時四十分

場所　日本山岳会会議室

［出席者］　村木会長、中村、斎藤、宮下各副会長、大屋、吉永、中川、大谷、松浦、伊藤、水野、堀井、渡邊、溝口、田邊、宇田川、熊崎、大蔵各理事、川崎、石橋各監事、小倉、大倉、村井、大森、神崎各常任評議員

［委任］山本、南井各理事、重廣常任評議員

【審議事項】

㈠　W・ウエストン師の写真借用許可願の件　大屋

駐日英国大使館で毎年一回発行の広報誌［Quality Britain］（一九九七年一月発行予定）に「日本で活躍した英国人」を企画、登山で有名な宣教師W・ウエストンもそのひとりとして紹介すべく、英国大使館広報部より本会所蔵の顔写真借用願が出された。　承認

㈡　W・ウエストンの資料写真の借用許可願の件　大屋

島根県松江市在住の岡崎秀紀氏が独自で研究を行い、チベット学僧能海寛氏とウエストン氏が慶応義塾で出会った新事実など、岡崎氏の地道な努力の成果を紙面で紹介するため、本会所蔵の資料写真の借用願が中国新聞社松井総局より出された。承認

㈢　マナスル・フィルム借用願の件　大屋

平成九年一月二十五〜二十七日開催予定の「関東高体連登山部顧問研修会」で、日下田実会員（マナスル登頂隊員）が講演、それに伴い上映したい、として本会所有（制作一九五六年　毎日新聞社）一六ミリフィルム「マナスルに立つ」の借用許可願が、同事務局長渡邊雄二氏（本会会員）より出された。　承認

㈣　本年度年次晩餐会の件　中川

十二月七日㈯、新高輪プリンスホテルにて開催。会費・一万五千円。

①マナスル登頂四十周年記念行事として、講演会・映写会

写真パネル展（毎日新聞社）場所＝高輪プリンスホテル本館・プリンスルーム

②K2登頂報告会（講演会・ビデオ・写真パネル展示）

スケッチ絵画展・写真展、委員会同好会発表展示。場所＝新高輪プリンスホテル・慶雲の間　承認

㈤　会計（中間）報告の件　吉永

平成八年度上半期（四〜九月）の収入＝九三・五パーセント、支出は執行率四〇・二パーセントである。対象会員＝五千四百九十九名、未納金約八百万円については十月末に振替請求書を送付。上半期新入会員＝百五十七名（二十六歳未満＝八名）。

㈥　会計監査報告の件　川崎

十月十五日実施、出納簿・預金通帳・支出伝票とも記帳は正確になされ、支出についても妥当であることを認める。　承認

㈦　講師派遣要請の件　大屋

①十一月二十三日㈯、越後支部創立五十周年記念晩餐会のイベント「マカルー登山」講演の講師として、重廣常任評議員の派遣が越後支部より要請された。　承認

②十月二十七日㈰、青森県山岳連盟、日本山岳会青森支部、青森県勤労者山岳連盟共催による「白神山地を考える登山者の集い」シンポジウムに、本会自然保護委員会・澤井政信委員長にパネリストとして参加を要請された。　承認

【報告事項】

㈠　ネパール・マナスル四十周年記念行事の件　吉永

十月三日マナスル登山隊関係者七名を含む二十一名で訪問。十月四日本会主催レセプション。現地より前・現総理を始め百三十名の出席で開催。席上、クリシュナ・B・バルマ氏に対する名誉会員の推戴、同行の毎日新聞記者より毎日新聞社記念品の贈呈。マナスルを飛行訪問。関係者の国王謁見。十月八日ネパール登山協会レセプションの招待を受けて、後帰国した。

村木会長より、先行して現地折衝に当たられた松田評議員、現地における各種行事に努力され、滞りなく進行に当たられた宮原巍会員に感謝の言葉が述べられた。

㈡　K2登山隊一九九六の件　大屋

九月二十七日、明治大学創立百周年記念会館において、祝賀・報告会を開催、青年部・学生部の努力で二百三十名が参加、盛会のうちに終了。

㈢　全国支部懇談会の件（主管＝東海支部）　中川

十月五〜六日、鳳来町「山びこの丘」を主会場として開催、本部より宮下副会長以下K2登山隊メンバーを含め十八名が参加。人工壁の登攀、中高年登山シンポジウムでは突っ込んだ意見が交わされ、翌日の登山も含めて、来年K2登山を目指す東海支部の熱気あふれる集いであった。

㈣　評議員会議の件　小倉

十月十六日㈬、評議員会議を開催（出席十六名、委任三名、村木会長、中村、宮下各副会長）、議題として本年度の名誉会員推薦について審議。

七名の推薦を村木会長に具申。

【委員会報告】

●青年部・宇田川

・日本山岳会全国大学山岳部監督会議について。

・K2登頂報告会、十月二十四日恵比寿区民会館にて開催。

●科学研究委員会・松浦

・十月三日開催の講演会「環境と森林」が盛況裡に終わり、内容を広く会員に伝えるため、「山」に記事として掲載する。

●自然保護委員会・大蔵

①鳥海山中間報告書が完成、九月十九日、環境庁・山形県庁環境保護課に提出した。

②十月二十七日、青森の「白神山地を考える登山者の集い」で、澤井委員長、伊藤委員が考え方を発表予定。

③自然観察会を十一月十六日、函南ーカンナミ原生林で行う。講師・山口博昭氏。

④山の自然学講座活動について。

・ネパール・シバプリの植林は、現地住民の協力で七百本を植樹した。

・上高地山研インタープリターは、延べ二千人に自然解説。山研と温泉ホテルで「山の自然を語る夕べ」を二十回開催、延べ五百人の参加があり大変好評だった。

・ヨセミテ・バックカントリー調査行として九月に九名が渡米、ウイルダネス地区を四日間歩き公園管理協会担当者との話し合いもできた。

●山研委員会・溝口

・山岳研究所利用現況報告

山岳研究所利用状況

	宿泊数	金　額	ゴミ代
4・5月	164人	571,000円	16,400円
6月	149	515,300	14,900
7月	173	508,300	17,300
8月	343	1,100,100	34,300
9月	100	303,000	10,000
合　計	929	2,997,700	92,900
10月	104人（10月17日現在予約数）		

●総務委員会・中川

・十月二十六日、十四時より上半期新入会員を対象としてオリエンテーション開催。

・十二月七日、新高輪プリンスホテルにて支部長会議を開催。

●集会委員会・中川

①十月十八〜二十日、きのこ山行、山形支部の協力を得て山形県摩耶山にて実施。

②十二月八日、年次晩餐会後の懇親山行は奥多摩・日の出山で実施。

③平成九年一月十〜十二日、スキー懇親会、八方尾根国民宿舎。

●指導委員会・熊崎

青年部・学生部との共催により十月十九日から、講師四名、研修生二十名（学生十三名）の参加をもって、富山県立山の文部省登山研修所において、岩登り技術研修会を開催する。

中級程度以上の岩登り経験者を対象とし、トータルプロテクションシステムの構築を中心に、アルパインクライミングにおけるもっとも理想的な確保技術とは何かを検討し、習得することを目的とする。

ルーム日誌

10月

1日　アルパインスケッチクラブ
2日　青年部
3日　科学委員会　集会委員会　山学研
4日　学生部　フォトビデオクラブ
7日　総務委員会　山岳編集委員会　資料委員会
8日　二火会　アルパインスケッチクラブ　自然保護委員会　95同期会
9日　ジャック93会
11日　図書委員会
15日　山研委員会　フィルムビデオ委員会　アルパインスキークラブ
16日　評議員会　常務理事会　三水会
17日　理事会　集会委員会　学生部
18日　緑爽会
21日　総務委員会　山岳編集委員会　図書委員会
22日　自然保護委員会
23日　アルパインスキークラブ　遭難対策委員会
24日　総務委員会　学生部
26日　総務委員会（新入会員オリエンテーション）
28日　山げらの会　山学研
29日　科学委員会　95同期会
30日　資料委員会
31日　自然保護委員会　学生部

10月来室者700名

東京グリーンホテル　都内に3店舗654室
各種ご宴会,ご会合にご利用下さい

水道橋店●〒101　東京都千代田区三崎町1-1-16　TEL.03-3295-4161
御茶ノ水店●〒101　東京都千代田区神田淡路町2-6　TEL.03-3255-4161
後楽園店●〒112　東京都文京区後楽1-1-3　TEL.03-3816-4161

INFORMATION

◆第六十八回「山の自然学講座」
自然保護委員会

日時　一月十八日(土)　十三〜十七時
場所　カンダパンセ（JR水道橋駅西口下車、正面の南に三〇〇メートル、三崎町二丁目の信号を右折してすぐ左）
内容　雷鳥保護と調査活動の実際（東京農大動物学教室講師・北原正宣氏）
　山の自然保護の在り方（岡島茂行会員）
参加費　二千円（学生五百円）
申込　当日で可
問合わせ　自然保護委員会・熊野将（FAX・〇三−三八二〇−〇二五七）

◆第二十五回山岳史懇談会
図書委員会

今回から、山域ごとの登山史がテーマです。立山・剱岳を取り上げました。大正十年（槙氏のアイガー東山稜）以降から昭和二十年代前半を中心に、明治末の柴崎芳太郎氏、吉田孫四郎氏の登山にも言及していただく予定です。
日時　二月二十一日(金)　十八時三十分〜
場所　日本山岳会集会室
演題　立山・剱岳の登山史
講師　井上　晃会員（富山市在住）

◆八ヶ岳アイスクライミング研修会
指導委員会・学生部・青年部共催

卓越した技術と経験を持つ講師が、アイスクライミングの最新理論やテクニックを基礎から指導します。初心者、未経験者、中上級者まで、ふるってご参加ください。
日時　平成九年二月一日(土)〜三日(月)
集合　一日朝六時に美濃戸口バス停前（または朝九時赤岳鉱泉）
　＊中途参加も可能です。ご相談ください。
対象　原則として積雪期登山及び岩登りの経験がある者。
　＊未経験者はご相談ください。
内容　①アイスクライミングにおけるプロテクションシステム
　②ダブルアックスクライミングのテクニック
　③アイスクライミングにおける懸垂下降技術
　④ジョウゴ沢ほか本番ルートでの実践登攀
　⑤積雪期登山におけるセルフレスキュー技術
講師　山本一夫（指導委員会委員・日本アルパインガイド協会所属）ほか
費用　赤岳鉱泉宿泊希望者（二万五千円・二泊朝夕食付き）
　天幕泊希望者（一万円・天幕、食事は自前で用意願います）
申込　指導委員会理事・熊崎和宏まで（TEL・〇四二二−三七−四六八二）。詳細案内を送付します。なお赤岳鉱泉宿泊希望者は早めにお知らせください。
　＊遭難救助費用が賄われる傷害保険、共済などに各自で必ず加入のこと。

◆伊吹山スキー登山
95同期会

日時　二月一日〜二日
申込・問合せ　一月二十日までに福岡孝昭まで（〒一六六　杉並区和田一−三五−一二　TEL・FAX〇三−五三四〇−八五四四　二十一時以降）高橋禎子（TEL〇五八−二三一−〇二九二）

◆第十回後藤三男油絵展

日時　一月十七日〜二十二日
場所　東急日本橋店六階・アートギャラリー
TEL・〇三−三二七三−三一一一（代）

◆第四回重複本の会員頒布

前年に引続き、図書室内の重複本の一部を希望者に頒布します。

書籍は図書ラベル、蔵書印、廃棄印及び受入印（ペン記入）つきで、本によっては多少の汚れ・傷みがあります。希望者は、九年一月二十日（必着）までに希望書名と返信用住所を明記の上、必ず『往復ハガキ』で図書管理委員会までお申し込みください。混乱をさけるため、希望図書はひとり二冊までとしますが、ハガキは一枚で結構です。
応募者多数の場合、当委員会で抽選の上、結果をハガキでお知らせします。電話での問い合わせはご遠慮ください。なお、書籍発送は一月二十四日頃、送料は各自負担です。
（図書管理委員会　水野　勉）

味の技、心でつくる
創作料理 むさし坊
むさし坊　日比谷店（東宝ツインタワービル9F）千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし坊　麹町店（有楽町線麹町駅際）千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし坊　神田西口店（神田西口通り商店街）千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友膳ゆうぜん（半蔵門線半蔵門駅3分）千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891
むさし坊　番町店（日本TV通り五番町交差点角）千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

頒布図書リスト

書　名	価格(円)	著者名	出版社名	発行年
1．ヒマラヤの男：テンジンの生きてきた道［第2刷］	500円	テンジン／井上勇（訳）	紀伊國屋書店	1955
2．世界山岳全集（第10巻）:アルプスの3つの壁　他	500	ヘックマイヤー　他	朋文堂	1960
3．嵐の大地：パタゴニア探検　1958−1962	1,000	E.シプトン／田村協子（訳）	山と溪谷社	1973
4．立山の平蔵三代	300	寺林峻熙	東京新聞出版局	1983
5．ガネッシュの蒼い氷：京都大学山岳部遠征記録1964	300	吉野熙道　他	朝日新聞社	1966
6．山形百山＊カバーなし	800	坂本俊亮	無明舎出版	1991
7．雲の中の九カ月	200	E.ヒラリー／丹部節雄（訳）	ベースボールマガジン社	1965
8．ローツェ・シャール1965年(リュックサック11号抜刷)	500	吉川尚郎	早稲田大学山岳部	1965
9．森からの警告：畑正憲・C.W.ニコル対談集＊カバーなし	500	加藤則芳（編）	CBSソニー出版	1988
10．ヒマラヤ編年誌（2）　1947−1950	500	M.クルツ／水野勉（訳）	日本山書の会	1975
11．雪山の生活者	300	トレンカー／久野豊彦（訳）	第一書房	1935
12．ダウラギリ登頂　＊箱なし	300	アイゼリン／横川文雄（訳）	ベースボールマガジン社	1963
13．今日のチベット（新日本新書 No.20）	100	高野好久	新日本出版社	1966
14．残照のヤルン・カン（中公新書 No.548　）	100	上田豊	中央公論社	1979
15．山行（旺文社文庫 No.61−1）	200	槙有恒	旺文社	1973
16．日本風景論(上・下巻)(講談社学術文庫 No.59，60)	300	志賀重昂	講談社	1976
17．忘れえぬ山（全3巻)(旺文社文庫 No.111−2，3，4）	1,000	串田孫一（編）	旺文社	1978
18．赤岩：クライミング・ガイドと登攀史	1,500	小樽赤岩ルート研究会（編）	小樽山岳連盟	1984
19．登山の話	200	田村剛	文化生活研究會	1925
20．紀行と随想（山溪山岳叢書 No.2）	200	三田尾松太郎	山と溪谷社	1947
21．一登山家の思い出（角川文庫 No.0532）	500	ジャヴェル／尾崎喜八（訳）	角川書店	1952
22．山の思想史（岩波新書 No.860）	100	三田博雄	岩波書店	1973
23．山と溪谷：随筆篇（角川文庫 No.0194）	200	田部重治	角川書店	1957
24. Conquistadors of the Useless	1,000	Lionel Terray	Victor Gollarcz	1963
25. The Complete Mountaineer［3rd ed. Revised］	500	George D. Abraham	Methuen	1923
26. Upon that Mountain［Reprinted］	1,000	Eric Shipton	Hodder & Stoughton	1947
27. Alpine Pilgrimage	1,000	Julius Kugy	John Murray	1934
28. The Epic of Mount Everest［Reprinted］	1,000	Francis Younghusband	Edward Arnold	1928

■会員異動

物故

三上正治（五五四二）8・8・20
泉　亮（六三二三）8・9・18
桑原重夫（一〇〇三五）8・9・30
林田正幹（一〇三七五）8・10・8
久木春男（二八六三）8・10・19

❖編集後記❖

相山之良さんの「山の切手」は、岡澤祐吉さんの提案で始めたものですが、本号の第十五回で一応終わります。毎号興味深い内容と達意の文章をお寄せくださった相山さん、ありがとうございました。また折りをみてお願いします。

十二月七日、年中行事の年次晩餐会は盛会裡に終わりました。もう年の暮れです。毎年のことながら一年がたつのは早いものだと感じます。

本欄を借りて年末のご挨拶を送ります。「会員の皆さま方、よいお年を！」

会報編集委員一同

日本山岳会会報　山　619 号
1996年（平成8年）12月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102
東京都千代田区四番町5−4
サンビュウハイツ四番町
TEL　東京 (03)3261−4433
FAX　東京 (03)3261−4441
発行者　村木潤次郎
編集人　伊藤　敞
印　刷　株式会社　双陽社